

## 【書評】

# 藤山直樹著 『落語の国の精神分析』

高 柳 和 美

土居健郎は著者が2003年に著した『精神分析という営み』に寄せた序文のなかで彼の書く文章を「juicy」と評していた。私はかつて著者の講義を受けたことがあるのだが、著者の文章を読んでいる時はいつも、書かれた言葉に沿って彼の声が聞こえてくるような気がする。このように、著者の書いたものが生彩に富んでいること、読んでいるあいだその声が生き生きと蘇ってくることを、私はこれまで、彼が精神分析家という特殊な語りを生業とする人だからなのだろうと単に考えていた。それゆえ2012年11月に上梓された本書を手に取り、落語と精神分析という取り合わせに意外性を感じる一方で、ひどく腑に落ちるものがあった。これまで精神分析に関する専門書、入門書を多く手がけてきた著者は、その一方で7年間みずから落語を口演しているのだという。

落語と精神分析のあいだに「何か本質的な重なりとつながりがある、というのはきわめて個人的な直感」(p.5)だと著者はいう。「個人的な直感」とはいえ、ほかならぬ精神分析家の直感である。自らのパーソナルな情緒や物思いを注意深く検討すること(逆転移を利用すること)が分析家の仕事の核心の一つであることは、著者のこれまでの著作を読めば明らかである。間主観的な分析空間において「個人的な直感」から発する物思いは、単なる独我論的な思惟ではなく、他者である患者を理解することにつながる。したがって、落語と精神分析という相異なる二つの文化が著者の中で共存している理由は、もちろん著者自身の性質によって説明されるかもしれないが、しかし同時に、落語と精神分析が共有する何かを著者が受けとっているとも考えられるのである。

本書の軸は二つある。一つは落語の根多の人物造形、ドラマツルギーの分析であり、もう一つは精神分析家と落語家という職業、そのあり方の類似性に関する考察である。

本書で取り上げられるのは、らくだ、芝浜、よかちよろ、文七元結、粗忽長屋といった、それぞれに魅力の異なる根多である。著者が根多を扱うスタイルは一貫している。例えば「らくだ」について論じるにあたり、著者は「私はこ

の噺が大好きなのだ。どうして私はこの噺が好きなのだろうか。この噺の面白さが、死体の存在と切り離せないものであることは漠然と感じていた。しかし、なぜ死体が出てくることが魅力となるのか」(p.29) と思いつめさせる。まずは噺の聞き手としての自身の感情、考えに耳を澄ませる。それが問いかけを生む。そして答えに迫ろうと手探りする過程で、登場人物の台詞や心情が丁寧に読み解かれる。そうした読みがとりわけ際立っているのは「芝浜」の分析である。この根多では、なぜこの噺が観客に感動を生むのかということが問われる。勿論、「アルコール依存からの脱却」といういわゆる「人情噺」は受けやすい。だがアルコール中毒の治りにくさを考えると、もし断酒の成功の過程にリアリティがなければ、聞き手を真に納得させ、感動させることはできない。そこで登場人物の一語一語が検討に付される。著者は三木助バージョンと談志バージョンの台詞を比較し、談志が登場人物に語らせた言葉の内いかに「断酒の成功」について観客を説得するに足るリアリティがあるかを明らかにする。その他の根多では、わたしたちは狂気とどのように向き合うかということや、型にはまらずにのびのびと生きることの楽しさ、粗忽であるとはどういうことか、などが語られる。いずれも、精神科医・精神分析家としての視点にたちながら、結論を無理に精神分析の用語に落とし込むことなく、著者自身が自由連想をしているかのように自らの生と思い合わせながらそれぞれの根多の面白さを追想し、その世界を生きなおしている。

第一章と最終章では、落語を語る落語家、精神分析を実践する精神分析家という二つの存在が重ね合わされる。著者によると、観客は落語の物語だけを聴きにくるのではない。何人もの登場人物を演じ分けつつも、その裏で一人の表現者として存在する落語家の生をもまた、観客は楽しむのである。他方、精神分析を受ける患者は、分析家から単に解釈を受けとるだけではない。分析家は、患者との間で絶えず自分を見失いながらも、主体性の混乱を生き延びてある一つの視点を回復し、患者に解釈を与えることができるのであり、患者はそうした生きた人間としての分析家の存在にもまた支えられるのだという。

ここまで読むと、落語と精神分析という一見接点のなさそうな二つの文化が、いかに近いものであるかが納得させられる。ただし、気になる点もある。本書における「落語」「落語家」の定義である。著者の根多の分析が主に立川談志バージョンに依拠して進められていること、著者が念頭に置く「生きた落語家」が他の誰よりもまず談志であることを考えると、本書のいう「落語」とは、とりわけ「談志の」という接頭辞付きの落語であり、「落語家」とは談志その人を

指すことになるのではないか。

巻末に置かれた立川談春との対談は、著者の読解に落語家が応えるという形で進められており、本書における試みが「精神分析的枠組みで落語を語る」といった一方通行的なものとならないように配慮されている。実際、対談の場で落語家は、本書で示された著者の解釈をあっさりと覆すような言葉を口にした（自分の演じる「芝浜」では最後に酒を飲むという落語家の発言は、この根拠を「アルコール中毒からの回復」とする本書での再構成に反している）、精神医学・精神分析に対する疑念を呈したりする（落語家は著者に「精神分析とは結局宗教と同じではないか」と問いかける）。落語家からの応答によって、著者のこれまでの分析が宙吊りにされる。そこで読者であるわれわれはもう一度本文に立ち戻ることになるのだが、この二度目の読みは、一度目の読みと同じものとはならないはずだ。

全体を読み終えた後で、本書の核となっているものを一つ挙げるならば、それは「生きている」という言葉であろう。「生」といっても物理的な生ではなく、心的な生のことである。これこそが精神分析と落語に共通するエッセンスである。D.W.ウィニコットに由来する「aliveness」は、これら二つの文化を超えて、文化一般が普遍的にもつ創造性に深く関わるものである。その「生きていること＝創造性」の具体的な姿を、精神分析家ではない生身の私（が紡ぐエッセイ）と精神分析家という職人である私（の伶俐な分析）を対話（交錯）させながら、落語の世界で読み解いてみせたのである。